令和2年度　学校経営計画・学校評価シート

高知県立高知江の口特別支援学校高知大学医学部附属病院分校

《高知県の教育の基本理念》	（1）学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち （2）郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	《目指すべき姿》	学校像	児童生徒の病状の程度、能力、適性、進路に応じた教育を行い、学校、医療・福祉、保護者、地域との連携のもとに、学ぶ楽しさや生きる喜びを育て、自己肯定感をもって社会参加し、自立できる人間に育てる。	目指すべき取組姿の概要
《取組の方向性》	①チーム学校の構築 ②厳しい環境にある子どもたちへの支援 ③地域との連携・協働		児童生徒像	・自分や周りの人たちを大切にできる児童生徒 ・目標をもち、自ら考え行動できる児童生徒 ・自分の将来に夢をもつことができる児童生徒 ・病気の回復や改善に必要な態度や習慣を身に付け、病気に負けず夢や希望に向かって進もうとする児童生徒	実現に

センター的機能の発揮及び、チーム学校として組織的・協働的に以下の項目に取り組む。
【1】専門性の向上
◇病弱教育に対する教職員の知識とスキルの向上を図る。
ICTを効果的に活用した「主体的・対話的で深い学び」につながる実践研究を行い、授業力の向上を図る。
【2】キャリア教育の充実
◇児童生徒の自己肯定感や自尊感情を育む。
【3】学校設定項目
◇多様な教育ニーズに対する教育内容の創造。
高知県特別支援学校再編振興計画（二次）に係る確実な進捗管理
【4】働き方改革
◇適切なタイムマネジメントと業務の効率化。

《重点取組項目》

（評価　A:目標を十分に達成　B:ほぼ目標を達成　C:やや不十分　D:改善を要する）

項目		取組ねらい 【P】	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容 【D】		中間評価 【C】	中間評価後の取組内容【P・D】		年度末評価 【C】		学校関係者評価	見直しのポイント 【A】
専門性の向上	病弱教育に対する知識とスキルの向上	◆ICTを効果的に活用した「主体的・対話的で深い学び」につながる実践研究を行い、授業力の向上を図る。 ◆学習の空白や遅れを作らないように、個々の児童生徒の実態に合わせた授業づくりを行い、安心して前籍校に復学できる学力をつける。	◆教員のICT活用の情報収集を行い、より効果的な活用を図る。 ◆転入時において、学習の空白や遅れがある児童生徒は少なくない。しかし、病状や治療で学習できる時間は限られているため、各教科等において学習内容を精選し、効率的な授業を行う必要がある。 ◆児童生徒の病気は多岐にわたっており、病気についての知識・理解を深めると共に、医療及びSCと連携する。 〈評価指標〉 ○学校評価における児童生徒アンケートの学習の満足度に関する項目の肯定的評価「そう思う」を80%以上。 ○学校評価における教員のICTの効果的活用についての項目の肯定的評価「そう思う」を80%以上 ○教員の授業評価チェックシートと児童生徒用の「学びのシート」を活用して研究授業等を年2回以上実施する。 ○転出時、個々の児童生徒の主要教科の未学習の内容を10%以内にする。	◇ICTを活用し、効果的で効率の良い授業へ改善するため研究授業を各自年間1回以上実施。（教員の授業チェックシートと児童生徒用の「学びのシート」を活用） ◇ICT支援員等外部講師を活用し、プログラミング教育に関する教員の研修会を年間2回以上実施。 ◇前籍校での学習の進捗状況を確認しながら授業内容を精選して進める。 ◇医師等の外部講師を招聘しての「病気」についての研修会を年間3回以上実施。 （児童生徒の病気に合わせた内容） [テーマ例] ・「小児の心臓病について」 ・「小児がんについて」 ・「児童生徒の心の病気について」 ・「病気の子どもの心理的ケアについて」等	B	◇改善した授業評価チェックシートを活用して中学部教員が研究授業をそれぞれ1回行った。本分校の授業形態での「主体的・対話的で深い学び」について検討できた。また、授業チェックシートを活用しての課題が明らかになった。 ◇ICT支援員による研修会（プログラミング）を1回実施、プログラミングの基礎について理解し、教材づくりに生かしている。 ◇医師等の外部講師を招聘しての研修会は、休業や今後の状況も踏まえ2回とし、計画、準備中である。 ◇本分校のSCを講師とし、「ネットいじめ」についての研修を行った。見えないところでのいじめについても日頃から配慮が必要であることを教員全員で確認できた。	◇今後、小学部の教員が研究授業を実施予定。 ◇3学期に実施予定の研修では授業の中でどのように取り入れていくべきかについて研修を深める。 ◇「学齢児の心身症について（11/5）」、「摂食障害（時期未定）」について実施予定。	C	◇「授業評価チェックシート（教師用）」と「学びのシート（児童生徒用）」を活用して教員は研究授業を1回以上実施できた。自主的に2回以上の授業評価に取り組む教員がいたり、ICT機器を意識的に授業の中で活用したりするなど授業改善・授業づくりに努めた。 学校評価アンケートで児童生徒は学習の満足度について2項目で「そう思う」が100%であった。教員はICTの効果的活用の「そう思う」が60%であった。 ◇ICT支援員による研修会（プログラミング）を2回実施した。プログラミングの基礎について理解が進むとともに、授業への取り入れ方についても研修できた。 ◇医師等の外部講師を招聘しての研修会は、コロナウイルス感染症対応のため計画しただけの研修は実施できなかった。「学齢児の心身症について」は実施でき、不登校児童生徒の病状や対応について学ぶことができた。本分校のSCを講師とし、「ネットいじめ」についての研修も行った。見えないところでのいじめについても日頃から配慮が必要であることを教員全員で確認できた。 ◇担任は前籍校と連絡を取り学習状況、学習進度を丁寧に把握した。在籍した児童生徒は学習空白、学習進度の遅れもなく前籍校に戻ることができた。 ◇テレビ会議システム、教室を提供し、高校生2名を遠隔で前籍校とつなぐことができた。分身ロボットの提供があり、児童生徒はマジックショーや校外での学習を楽しむこともできた。	B	◇学校評価アンケートの教員の評価について、教員の自己評価はどのように判断しているのかという質問が病院関係者よりあった。教員は、主観により記入しているため、自分自身が「そう思う」と思えるよう達成感、満足感が得られるような取組にしていく必要がある。 ◇教員の技術力向上の一方で、児童生徒がプレゼンできるようにするといいのではないか。プレゼンについては上手にできない人もいるので発表資料を作り、プレゼンするような活動もいいのではないか。 ◇学校評価アンケートの「教員のICTの効果的活用」の「そう思う」が60%であったことから、学校の年度末評価は「C」となっているが、目標に数値を入れる場合は、慎重にするとよい。 ◇今年度は、不登校の児童生徒も多かった。分校での学習支援だけでなく、前籍校とも連絡を取り、退院後の生活にもつないでくれた。そのように努力してくれたことは認めたい。	①ICTの活用については、引き続き教員の技術力向上を目指すとともに、児童生徒自身が自分のタブレット端末を操作し、活用できるようにする。その中でプレゼン力の向上も図る。 ②学校評価アンケートで教員が「そう思う」と評価できるよう、学校目標、個人目標をつなげ、実際の取組についても達成できるよう具体的方策を立てる。教職員が、自分の取り組み内容を客観的には評価できるようにする。教職員の努力と行動により目標が達成されるよう次年度の学校経営計画を立案する。 ③目標に達成率を数値として入れる場合は、分校は教職員の数が少なく一人の評価で大きく左右されるため、その内容を熟考して設定する。
キャリア教育の充実	児童生徒の自己肯定感や自尊感情を育む	◆登校や学習への指導・支援に困難性が高い児童生徒への取組を進める。 ◆病気と向き合いながら、進路や職業について考える力を育み、学習意欲を高める。そして、治療に向かう力にもつなげる。	◆病気のため学習意欲が低下していたり、自分の将来に目を向けにくかったりする児童生徒は少なくない。よって、外部講師を招き、児童生徒が自分の将来の生活について考えるきっかけにしたり、ストレス発散の場を設ける必要がある。 ◆自立活動等の時間を効果的に活用し、入院生活のストレスの軽減を図り、学習意欲を高める。 〈評価指標〉 ○外部講師による児童生徒の学習の時間を年間5回以上実施する。 ○学校評価アンケート等の分析	◇ゲストティーチャー等による授業及び、ボランティア等による課外授業を実施。 ◇登校や学習への指導・支援に困難性の高い児童生徒がでた場合は、医師・看護師・SCを含めた支援会議を実施し、支援方法等を検討する。 ◇自立活動の時間に、本人の興味関心を考慮しながら、体を使ったゲームやボードゲーム、ドローン等を取り入れながらストレス軽減を図る。また、状況によってはSCと連携して支援する。	B	◇「将来の仕事を考えよう～看護師の仕事」として高知大学医学部看護学科松本智津准教授を迎え、授業を実施した。生徒は日頃から接している看護師の業務内容を知り、驚いていた。質問もよくできており、職業について考える機会となった。 ◇前籍校で不登校であった生徒が2名在籍したが、学習状況について本人、保護者、医師等と確認し対応した。2名とも本分校の授業は受けることができた。 ◇自立活動で将棋やゲーム等をしながら学習課題や入院中の思いを話すことでストレスの軽減や心理面の安定を図った。	◇医師、看護師、前籍校の教員等の関係者を含めた支援会を開き、情報共有し、支援方法について確認する。 ◇児童生徒の病状や学習計画を考慮しながら自立活動を効果的に実施する。	A	◇ゲストティーチャー等による授業として看護師、理学療法士を講師として迎え、2回授業を実施することができた。児童生徒は、入院中にお世話になっている人であったのが、職業人として具体的にイメージすることができた。 ◇不登校や家庭の状況に困難のある児童生徒が在籍した時には、医師・看護師・前籍校を含めた支援会議を実施し、支援方法等を検討し支援につなげることができた。支援会議は8回実施した。 ◇自立活動の時間に、本人の興味関心を考慮しながら、体を使ったゲームやボードゲーム、ドローン等の活動を行った。学校評価アンケートでは、「そう思う」「ややそう思う」が75%であった。	A	◇ゲストティーチャーの取組はよい経験となる。学校は計画的に実施しているため、入院した児童生徒全員がその授業を受けることはできない。ビデオに録画してストックしておくと色々な職業人の話がいつでも聞けるようになるのではないか。	①次年度以降もゲストティーチャーは迎えたい。ビデオ録画については、講師の了承を取り実施する。 ②不登校の児童生徒の支援方法について研修の機会を設ける。 ③支援会議は、病院・学校が連携して効果的に行う。
学校設定項目	多様な教育的ニーズに対する教育内容の創造	◆訪問教育の充実を図る。 ◆病院、保護者、前籍校との連携し、学習の保障と充実を図り、円滑な前籍校への復学につなげる。	◆本年度から訪問教育を担当するため、随時、教務部を中心に体制作りを行い教育内容の充実を図る。また、分校としての取組の実践を積み上げる。 ◆病院と連携し、病状の確認・治療の見通し等を確認しながら学習内容の充実を図る必要がある。 ◆スムーズな復学に向けて、児童生徒の状況に応じて居住地校交流を実施する必要がある。 〈評価指標〉 ○訪問教育の現状や実践を職朝や職員会等で確認し、情報共有を行う。また必要に応じて支援会を実施する。 ○医教連絡会を5回以上、医教連絡協議会を2回実施する。 ○参観週間を年間3回実施する。	◇訪問先の病院と情報共有を行いながら連携する。何らかの課題が発生した場合は、本校や特別支援教育課と連携して検討する。 ◇医教連絡協議会及び医教連絡会の実施。 ◇必要に応じての支援会議の実施。 （前籍校、病棟、分校等） ◇参観週間を各学期に1回実施する。 （保護者・病院関係者に案内） ◇児童生徒の状況等によって、テレビ会議システム等を活用し、居住地校交流を実施。	A	◇4月から小学生1名について訪問教育を実施した。児童、保護者、前籍校、病院と連携し、学校再開後に授業を行った。 ◇医教連絡協議会を実施し、本分校の学校経営計画と学校評価アンケートの内容について確認した。医教連絡会については2回実施し、児童生徒の病状、支援内容、新型コロナ感染症対策について助言をいただき、確認することができた。 ◇参観週間10/19～23	◇今後も訪問教育をスムーズに実施できるようにするために、今後の課題について検討する。 ◇学校評価アンケートをもとに、医教連絡協議会を実施し、改善につなげる。 ◇児童生徒の状況により、医教連絡会を実施し、必要な情報を得る。	B	◇4月から在籍した小学生1名については、学校再開後に訪問教育を開始し、7月に前籍校に戻った。休校もあったが、順調に学習を進めることができ遅れもほとんどなかった。 ◇医教連絡協議会は2回、医教連絡会は5回（6回の見込み）実施した。必要に応じて、医師、看護師、前籍校とも密に連絡を取らせていただき、その都度時間をおかずに対応した。前籍校に戻ってからも問題となるようなことは特に出ておらず、支援方法をスムーズに移行できたと考える。 ◇参観週間を2学期、3学期に1回ずつ実施した。 保護者・病院関係者に知らせ参観してもらった。 ◇分身ロボットの提供があり、児童1名、生徒1名が前籍校と交流できた。入院中の児童生徒の元気な声を聞いて、クラスの友達が安心する様子が見られた。また、つかの間ではあったが、在籍児童生徒が入院生活での寂しさを紛らわす様子も見られた。	B	◇訪問教育でもテレビ会議システムが使えるといいのではないか。	①テレビ会議システムについては、必要な時に確実に使えるように準備しておく。訪問教育での可能性については、ケースがあればその都度確認し、必要があり、実施可能であれば活用する。 ②学校の活動について、保護者、病院に知らせよりよい学校づくりへのご意見をいただけるよう協力を求める。
働き方改革		◆適切なタイムマネジメントと業務の効率化を図る。	◆H30年度からH31年度にかけて、業務内容等の細かな改善や研究体制の見直しを行い効率化を進めることができた。今年度は、訪問教育を担当するため、新たな仕事の偏りができる可能性がある。 〈評価指標〉 ○年休：10日以上取得 ○反省職員会等の意見 ○面接による教員からの聞き取り	◇仕事の偏りができないように教員間で情報共有を行いながらお互いに協力する。校務量等に偏りができた場合は、校長を含めた職員会等で対策を検討する。 ◇学期末の反省職員会等で状況を確認する。分校内で解決できない内容の場合は、本校や特別支援教育課等に相談する。	A	◇業務改善シートを示し、学部、分掌で「捨てる（なくす）、簡単にする（簡略化）、分担」の観点で業務内容の見直しを行っている。職員会議等で業務の内容や進行状況を確認しながら進めている。 ◇夏期休暇は全員5日間取得することができた。また、特休、年休と休日を合わせて5日以上連続して休暇を取得できた。	◇引き続き、情報収集を行いながら職員会議等で検討して進める。 ◇引き続き、年休取得を促す。休暇を取りやすい環境づくりを行う。	B	◇各教員が自分の業務を確実に行うことができた。その分、協力を求めることは少なかったが、必要な時には声を掛け合い、動けるものが率先して動くことができていた。 ◇業務改善シートにより、業務内容を見直すことで、書類作成での重複をなくしたり、会議の縮小化、回数減等につなげることができた。 ◇夏季休業中、冬季休業中に連続休暇を取得するようにしてきたが、4月から1月までの間で10日以上年休を取得したものは2名、9日が2名、7日以下が2名であった。	B	◇学校は17時退勤を目指しているが、連絡等で支障はなかった。連絡体制だけしっかりしておいてもらえればよし。	①次年度も、病院との連絡体制を年度当初に確認する。 ②業務内容の見直しについては、次年度も引き続き行う。 ③不要なものが長年放置されている状況もあるため、次年度の仮移転を機に適正な処分を行い、働きやすい環境を作る。